

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11682

研究課題名(和文) 新生児に対する「看護職の応答性スキル促進教育プログラム」の開発とその評価

研究課題名(英文) Development and Evaluation of an Educational Program to Facilitate Nurse Responsiveness to Infant behaviors

研究代表者

大田 康江(Ota, Yasue)

順天堂大学・医療看護学部・准教授

研究者番号：80650134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：産褥早期の母児ケアに従事する看護者を対象に、母児関係構築促進支援を目指し、新生児に対する応答性スキル向上に焦点をあてたe-learningプログラムを開発し、看護者の母児への関わりの変容を言語的、行動的、認知的側面から介入効果を検証した。効果として、看護者の児への応答性が向上し、母親との関係性構築において応答的・養育的・模範的態度への行動変容がみられ、結果として母親の看護者の児との関わりを模範として追従する言動が促進されるという介入効果が認められた。看護者が、産褥早期の母児関係構築を促進するための有効な教材として、本プログラムが活用可能であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：We developed an e-learning program for nurses who engage in early postpartum mother-infant care, focused on responsiveness to infant behaviors, aimed at providing encouragement and support for the creation of bonds between the mother and baby. We evaluated the efficacy of the program in terms of changes in behavior, attitude, awareness, and verbal communication approach observed before and after they received the intervention of the e-learning program. Nurses' responsiveness to the babies improved. With respect to their relationships with mothers, the nurses appeared to respond to the mothers' feelings and needs and treated them with affection and supportive attitudes. And they succeeded in serving as a role model and some of the mothers started making effort to mimic the role they saw them playing. This suggests that the program has the potential for use as an effective educational program for nurses to facilitate the creation of early postpartum bonds between the mother and baby.

研究分野：医歯薬学

キーワード：母児関係 看護者 応答性スキル e-learning 教育プログラム開発 産褥早期

1. 研究開始当初の背景

近年わが国では、核家族化と超少子化が進行し、家族機能の低下等の社会変容が見られる。この社会変容は、育児に関わる母親を取り巻く社会環境を大きく変化させている。母親が育児で最も心配を感じた時期は退院直後から1か月健診までの時期だったとする者が4割を占め、他者からの家事や育児の援助にも関わらず7割弱が産褥早期に睡眠不足で疲労を感じ、育児放棄感、自信喪失感、精神的な不調および子どもの扱いにくさを2~3割が感じたと報告されている(島田ら, 2006)。その理由として、母親たちの多くが子どもの要求を適切に掴めないことが挙げられ、なかでも特に児の泣きや睡眠トラブルへの応答に試行錯誤している(高山, 2004; 川上ら, 2011)。

もちろん、国内外ですでに母親が児の行動やサインを適切に読み取り応答できる力を高める母児相互作用促進のための看護介入プログラムが開発され、一定の効果をあげている(Garderら, 2006; Brown, 2006; 前原, 2006; 香取ら, 2010)。しかしながら、これらの介入は、母親が児の要求に対して示す応答性を高めるための看護に限局している。問題は、看護者には児のサインに適切に応答できるスキルが備わっていることを前提としていることだ。これらの問題に対する認識は以下の指摘に支持されるものである。母親役割を促進する看護介入に関するシステムティックレビューにおいて、効果的な介入方法は母親の児への応答性を高める看護だけでなく、看護者と母親との相互的关系性を重視することであると報告されている(Mercerら, 2006)。また、Karlら(2006)は、母親の児への愛着形成を促す看護者の関わり概念を提唱し、母子関係と同等に看護者と母親との関係性を重要視する必要性を述べている。さらに産褥早期における看護者の母児ケア場面における行動観察調査では、児との関係づく

りの模範となるべき看護者自身が、実際には児の行動やサインをキャッチし応答するスキルが十分ではなかったことが示唆されている(大田ら, 2016)。この課題の克服には、看護者の児への応答性を高め、母児との関係性を重視する、看護職を対象とした教育プログラムの開発が切要であると考えられる。

2. 研究の目的

産褥早期の母児ケアに従事する看護者を対象に、母児関係構築促進支援を目指し、新生児に対する応答性スキル向上に焦点をあてたe-learningプログラムを開発し、看護者の母児への関わりの変容を言語的、行動的、認知的側面から介入効果を検討する。

3. 研究の方法

1) 第1段階: 教育プログラム開発

(1) 産褥早期の母児関係促進支援における看護の構造

産褥早期のケア場面の参加観察、看護者への面接調査を行った。その結果、母親と看護者の2者関係を基盤とし、母児と看護者の3者関係に発展する看護の構造モデルが明らかとなった。この看護構造モデルは、看護者の母児への応答性とカウンセリング・コミュニケーションスキルをベースとした関わりが中心概念であった。

(2) e-learningプログラムの開発、学習管理システムの構築

Karlら(2006)のattacher(母児の愛着形成支援者)としての看護者の関わり概念、(1)で得られたわが国における産褥早期の母児関係促進支援における看護の構造およびFostatyら(2000)のICEモデルを基盤に教育プログラムを開発した。看護者の母親との応答的・養育的・模範的關係性構築のためのスキル授乳と児の睡眠が強く関連づけされることによって引き起こされる長期的弊害を理解し育児を支援できるスキル新生児の発するサインや行動を正しく認識し適切に応答できるスキルで獲得した知識、スキルを統合し、臨床実践に活用、を目標とする約3時間のe-learning教材を作成した。e-learningプログラムは、Step1(知識編) Step2(知識続編) Step3(実践編)の3段階構成とした。Step1(知識編)は、米国のJanice(2008)が開発したHUG your babyの日本語版を開発者の使用許可を得て使用した。

(3) e-learningプログラムの有用性評価

対象: 産褥早期の母児ケアに携わっているまたはその経験のある看護者10名

方法: e-learningプログラムを受講後にweb上で調査した。調査内容は、プログラムの内容の分かりやすさや、臨床実践への活用可能性についてリッカートスケール(とてもそう

思う5点～とてもそう思わない1点)で評価を求めた。また e-learning プログラムについて感想や意見を自由記載で求めた。

結果：参加者 10 名は、助産師であった。助産師の平均経験年数は 9.8(SD=5.0 年、範囲=3 年-18 年)であった。またプログラムの分かり易さについては、4.3(SD=.30)であり各コース終了時の知識テストでは、1 回の受講で概ね正答が得られており、知識定着につながっていた。臨床実践への活用可能性については、3.8(SD=.40)の評価であった。教材に取り組んだ感想として、「臨床でよく遭遇する事例が提示されており、実践的であった」、「児の行動やサインまであまり重視しておらず新鮮であった」という感想がみられた。実践編の事例演習における「あなたならどのように関わりますか」の回答記入作業に時間的余裕をもっと持たせてほしいとの意見があった。ナレーションのイントネーションが単調であり、やや不自然であるとの改善点が挙げられた。以上の結果より、事例演習における事例回答の際の時間延長の設定、ナレーション音声の工夫の改善を行った。

2)第2段階:e-learning 受講による看護者の母児への関わりの言語的、行動的、認知的変容からの効果検証

(1)対象

総合病院のバースセンターに勤務する産褥早期の母児ケアに携わる看護者 17 名

(2)研究方法

介入前として、授乳ケア場面において、母児に対する看護者の関わりおよび言動の参加観察を行った。その後、e-learning プログラム受講による介入を実施した。介入後は、再度看護者の関わり及び言動について授乳ケア場面における参加観察を行った。なお参加観察中は IC レコーダーにて録音し、フィールドノートにメモをとった。受講終了1か月後に、学習したスキルや知識に基づきケアした印象に残る1事例および今回の学習プロセスについて、Gibbs(1988)のリフレクションフレームワークを用いてリフレクション面接を実施した。面接中は IC レコーダーで録音した。

(3)評価方法

母児に対する看護者の言語的関わり変化を修正版 RIAS (Roter Interaction Analysis System)を用いて、定量的に分析した。さらに授乳ケア場面における看護者の関わりの変容を言語的・行動的側面から、定性的に事例分析した。リフレクションインタビューは、Braun(2006)のテーマ分析の手法に基づき看護者の認知的変容を分析した。

4. 研究成果

1)対象の属性

産褥早期の母児ケアに携わる看護者 17 名、平均経験年数は 7.11(SD=4.7 年、範囲=1-17 年)の助産師であった。分析対象場面は、介入前 52 場面、介入後 51 場面であった。

2) e-learning プログラム受講による介入効果の検証

(1)介入前後における看護者の母児への言語的变化の定量的分析

「相互作用促進」発話は、看護者、母親ともに有意に増加が認められた($t=-4.79, p=.00, t=-2.86, p=.01$)。なお、看護者の発話は、<児のサインをキャッチし応答・代弁><児のサインを教示・説明><児をひとりの人間として扱う・話しかける>すべての下位項目において有意な増加がみられ($t=-2.15 \sim -6.02, p=.05 \sim .00$)(表 1) 一方母親は<母親がナースの児への応答に追従>に有意な増加が認められた($t=-4.16, p=.00$)(表 2)。

表 1 看護者の機能的グループカテゴリー別発話平均

	介入前 (n=52)		介入後 (n=51)		t-value	p-value	95% CI	
	Mean(SD)	SD	Mean(SD)	SD			LL	UL
全発話数	1502.00	154.33	1571.65	957.77	0.58	0.54		
相互作用促進	9.17	0.6	17.26	0.6	-4.79	.00	-1.2	-0.2
児のサインをキャッチし応答・代弁	1.82	0.2	4.33	0.2	-5.48	.00	-0.4	-0.2
児のサインを教示・説明	1.32	0.2	3.89	0.2	-6.02	.00	-0.3	-0.2
母を一人の人間として扱う・話しかける	6.22	0.4	9.02	0.6	-2.15	.05	-0.6	.00
情報収集	11.15	0.5	14.69	0.6	-3.33	.00	-0.6	-0.1
母児の観察	2.79	0.2	8.57	0.4	-6.42	.00	-0.6	-0.4
医学的なことに関する開かれた質問	.67	0.2	.41	.01	.42	.68	.00	.01
生活心理社会的なことに開かれた質問	.39	.01	.13	.00	2.34	.00	.00	.00
授乳・育児に関する開かれた質問	5.42	0.3	3.39	0.2	3.42	.00	.1	.03
授乳・育児に関する開かれた質問	.59	.01	.26	.00	1.52	.15	.00	.01
生活心理社会的なことに開かれた質問	.09	.00	.23	.00	-1.41	.18	.00	.00
授乳・育児に関する開かれた質問	1.57	.01	1.65	.01	-.84	.42	-.01	.00
情報提供・保健指導	35.25	.13	27.13	.11	3.20	.01	.03	.13
医学的なことに関する情報提供	1.05	.01	1.59	.02	-1.11	.28	-.02	.00
心理社会的なことに開かれた情報提供	.40	.01	.38	.01	.11	.92	.00	.00
授乳・育児に関する情報提供	19.53	.05	7.35	.03	2.47	.03	.00	.06
母がナースの児への応答に追従	.37	.01	.50	.01	-.41	.69	-.01	.01
授乳・育児に関する助言・教育	22.90	.13	17.76	.13	2.01	.06	.00	.11
つわりの形成	22.30	.07	23.55	.05	-.67	.51	-.05	.00
社会的会話	3.06	.02	3.00	.02	.11	.91	-.01	.01
ポジティブな雰囲気を作る発話	12.86	.05	10.92	.04	1.39	.18	-.01	.06
ネガティブな雰囲気を作る発話	.56	.00	.03	.00	4.59	.00	.00	.00
感情表出の発話	1.38	.01	1.76	.01	-.94	.36	-.01	.00
関係性促進の発話	4.93	.03	7.83	.03	-3.28	.00	-.04	-.05
患者参加促進	17.45	.07	13.72	.05	2.38	.04	.00	.07
患者参加	2.62	.02	3.26	.03	-.74	.47	-.03	.01
発話促進	14.83	.05	15.44	.03	-3.40	.00	.02	.00

表 2 母親の機能的グループカテゴリー別発話平均

	介入前 (n=51)		介入後 (n=52)		t-value	p-value	95% CI	
	Mean(SD)	SD	Mean(SD)	SD			LL	UL
全発話数	165.82	82.194	220.35	168.627	-1.242	0.22	-147.6	38.541
相互作用促進	7.76	0.6	14.68	0.7	-2.86	.01	-1.2	-0.2
児のサインをキャッチし応答・代弁	1.46	.01	2.08	.02	-1.27	.22	-.02	.00
母親がナースの児への応答に追従	.46	.01	2.77	.02	-4.16	.00	-.03	-.01
母を一人の人間として扱う・話しかける	5.84	.05	9.82	.06	-1.93	.07	-.08	.00
情報収集	4.94	.04	3.52	.02	1.55	.14	-.01	.03
医学的なことに関する開かれた質問	.19	.01	.17	.00	.15	.88	.00	.00
生活心理社会的なことに開かれた質問	.20	.00	.33	.00	-1.75	.10	.00	.00
授乳・育児に関する開かれた質問	2.53	.03	1.04	.01	2.25	.04	.00	.03
医学的なことに関する開かれた質問	.07	.00	.23	.01	-.94	.36	-.01	.00
生活心理社会的なことに開かれた質問	.09	.00	.03	.00	.92	.37	.00	.00
授乳・育児に関する開かれた質問	1.88	.02	2.01	.01	-.26	.80	-.01	.01
情報提供・保健指導	24.13	.09	20.54	.09	2.41	.03	.00	.07
医学的なことに関する情報提供	2.31	.05	.54	.01	1.34	.20	-.01	.05
心理社会的なことに開かれた情報提供	1.54	.02	1.18	.02	1.11	.28	.00	.01
授乳・育児に関する情報提供	20.45	.07	18.88	.06	.75	.46	-.03	.06
つわりの形成	26.21	.11	26.22	.06	.00	1.00	-.05	.08
社会的会話	2.36	.02	2.88	.02	-.88	.39	-.02	.01
ポジティブな雰囲気を作る発話	18.77	.10	18.68	.07	.04	.97	-.05	.05
ネガティブな雰囲気を作る発話	.96	.01	.16	.01	2.58	.02	.00	.01
感情表出の発話	3.21	.03	2.73	.01	.73	.48	-.01	.02
関係性促進の発話	.88	.01	1.71	.01	-2.02	.06	-.02	.00
患者参加促進	34.07	.12	33.61	.11	.15	.88	-.08	.07
患者参加	1.62	.01	1.65	.02	-.06	.95	-.01	.01
発話促進	32.45	.12	31.96	.11	.17	.87	-.06	.07
発話促進	1575.00	10.72	23.63	18.71	-1.83	.09	-17.04	1.28

(2)看護者の言動的变化における定性的分析
介入後には、17 名中 13 名の看護者においては、児の行動に意識が向き、児を一人の人間として捉え、児のサインをキャッチし、適切に応答できる児への応答性が高められていた。さらに看護者の児への応答性が高まると、児との関係づくりのモデルとなるアタッチャーとしての役割行動が促進されていた。そして看護者にアタッチャーとしての役割行動がみられると母親が、看護者の児とのやりとりを模倣する行動がみられ、結果として母児相互作用が促進されることが示された。母親との関係性構築においては、母親の気持ち

やニーズに応え、母親を情緒的に包み込むような態度で接するアタッチャー（母児の愛着形成支援者）としての役割行動が促進されていた。しかしながら、介入後においても、4名は、母児との関わりにおいて、対象に合わせたコミュニケーション調整に課題が残った。

(3)リフレクション面接にみる看護師の認知的変容

教育プログラム受講終了1か月後、看護師への面接において、自己のケアおよび今回の学習プロセスへのリフレクションを促し、介入前後の母児への関わりについての看護師の認知的変化をBraunら(2006)のテーマ分析の方法に基づき分析した。

テーマ分析した結果、281コードが抽出された。それらは19サブテーマに集約され、8テーマ【児への新たな視点や更なる関心】【母児のペースに合わせる授乳支援はストレスレスケア】【乳房管理偏重ケアへの反省】【効果的な母親への教示の気づき】【看護師主導ケアへの反省】【自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤】【臨床とリンクさせながら意欲的に取り組める学習】【新たに獲得した知識やスキルの導入に向けての課題と展望】が生成された(表3)。表の【 】はテーマ、< >はサブテーマを示す。新生児の行動に関する新たな知識やスキルを獲得したことにより、児の行動観察の重要性の気づきが芽生え、乳房管理偏重、看護師主導などの自己の母児ケアへの内省がみられた。一方、自己の経験知に裏付けされる実践と今回獲得した新たな知識やスキルとのすり合わせ作業の中で、葛藤を抱えていることも表出された(表3)。

表3 リフレクション面接による評価

【テーマ】	<サブテーマ>
【児への新たな視点や更なる関心】	<児に対する新たな観察視点の気づき> <知識が活用できていなかった児の行動> <児の動きについての気づきや気づき> <児の成長や発達への関心>
【母児のペースに合わせる授乳支援はストレスレスケア】	<母のペースを無理した授乳援助への反省> <母乳が足りなくなる不安>
【乳房管理偏重ケアへの反省】	<母乳管理偏重ケアへの気づき> <母乳管理偏重ケアへの反省>
【効果的な母親への教示の気づき】	<自分の経験知と新たな知識との融合の葛藤> <自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤>
【看護師主導ケアへの反省】	<自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤> <自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤>
【自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤】	<自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤> <自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤>
【臨床とリンクさせながら意欲的に取り組める学習】	<自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤> <自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤>
【新たに獲得した知識やスキルの導入に向けての課題と展望】	<自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤> <自己の経験知と新たな知識との融合の葛藤>

産褥早期の母児ケアに従事している看護師を対象に、e-learningプログラムを作成し、17名の看護師に展開した。その結果、母児へのケア場面において、看護師の児への応答性が高められ、母親との関係性構築において応答的・養育的・模範的態度への行動変容がみられ、看護師のアタッチャー（母児の愛着形成支援者）としての役割行動が促進され、結果として看護師の児への関わりを模倣し追従する母親の行動が促進されるという介入効果が検証された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1) 大田康江, 高橋真理. (2016).産褥早期における母親の児への愛着形成を促進する看護師の関わり. 母性衛生 56(4), 618-625 (査読有)

〔学会発表〕(計 4 件)

1) Yasue Ota. Evaluation of a training programme for nurses and midwives to facilitate mother-infant bonding in the early postpartum period- Nursing role as an “attacher”-, The 5th Australian Japanese Symposium in Women’s Health, Feb 2017, Tokyo, Japan.

2) 大田康江, 高橋真理. 「産褥早期母児愛着形成支援」のための看護職トレーニングプログラムの介入効果—介入前後の事例分析より—第 46 回日本女性心身医学会学術集会. 2017年7月29日~30日, コングレスクエア日本橋(東京).

3) Yasue Ota, Mari Takahashi. Development of a web-based comprehensive educational programme for nurses to facilitate mother-infant bonding. International Marcé Society for Perinatal Mental Health Biennial Scientific Conference, Sep.26-28, 2016, Melbourne, Australia.

4) Yasue Ota. Facilitating mother-infant attachment during the early postpartum period—What is required for the midwife’s care? —, The 6th World Congress on Women’s Mental Health, March 23, 2015, Tokyo, Japan.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

e-learning

「看護職向け母児の絆形成促進トレーニングプログラム」

<http://primalhealth.sakura.ne.jp/attach/attachment/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大田 康江 (OTA, Yasue)

順天堂大学・医療看護学部・准教授

研究者番号：80650134

(2) 研究分担者

高橋 真理 (TAKAHASHI, Mari)

順天堂大学・医療看護学部・教授

研究者番号：20216758